兵庫県方言の言語地理学的研究

鎌田良二

本研究についての臨地調査は、本学昭和五十二年度卒業生、今西典子・岡本佳子・緒方みどり・守本照美・吉井貴子・吉川理子の六名が、昭和五十二年七月・八月・十月に行なったものである。調査には数十日を要したが筆者はその中、数日同行した。

調査語彙は二百九十語であったが、本稿では、その中「肩車」「おにごっこ」「むしる」「めんこ」の四語について記す。

調査地点は後に記す通りである。

本稿の言語地図作製は吉井貴子である。

兵庫県は近畿方言圏にあるが、近畿の西部を占め、県北部の但馬は中国方言圏に入っている。但馬は日本海に面し、県南部の播磨は瀬戸内海に面している。また、淡路島は四国に接するものである。県西部は山陰の鳥取県と、山陽の岡山県に接する。但馬は方言区画上、中国方言に属し、アクセント・音韻・語法上の特色はすべて鳥取県に通じるものが多い。

県北東部は京都府に接し、県南東部の尼崎市・西宮市・芦屋市は、いわゆる阪神間であり、大阪市と神戸市との間にある。この地域から大阪に通勤する人が多い。西の姫路市を中心として播磨工業地帯が広がり、近年大工場が進出してきている。

このようななかにおける兵庫県の方言語彙の状況はどのようなものであるかを考察してみたい。

本稿における「肩車」と「おにごっこ」とは『日本言語地図』（国立国語研究所編）にあるものである。これは、県下の状況と全国の状況とを対比しながら全国的視野で考察をすすめたいと思ったからである。

「むしろ」は、広戸惇著『中国五県言語地図』(風間書房)にあるものである。これも、中国地方に接する本県の状況をみることにより、鳥取・岡山両県に接する形をみることから語彙の言語地理学的考察を試みるためのものである。

「めんこ」は、この調査で新しくとり入れたもので、一般に子どもの遊び道具の名は変化しやすいものであるから、それを試みようとしたものである。

調査地点は百十三地点で、兵庫県内(淡路島を除く)と、県に接する京都府・鳥取県・岡山県の県境をも入れたものである。

調査地点は次の通りである。地点番号は『日本言語地図』の番号による。

京都府

5590.81 竹野郡網野字俵野
6500.33 中郡峰山町
6409.36 熊野郡久美浜町
6409.58 〃 野中支所
6429.19 天田郡下夜久野福田局
6500.54 中郡大宮町
6500.56 与謝郡岩滝町岩滝口
6500.84 〃 野田川町
6510.03 〃 加悦町
6500.89 宮津市宮津
6511.42 舞鶴市西舞鶴
6510.65 加佐郡大江町字南有路

6520.25 福知山市下柳町

兵庫県

6409.72 豊岡市豊岡
6419.15 出石郡出石町内町
6419.28 〃 但東町
6419.39 〃 〃 久畑
6419.20 城崎郡日高町
6409.00 〃 竹野町
6408.15 〃 香住町香住
6470.27 美方郡浜坂町居組
6470.79 〃 温泉町湯
6408.62 〃 村岡町長瀬
6418.21 〃 美方町石寺
6418.13 〃 村岡町村岡
6418.53 〃 〃 福岡
6418.74 養父郡関宮町出合
6418.76 〃 〃 関宮
6428.16 〃 大屋町筏
6418.97 〃 〃 樽見
6418.69 〃 八鹿町高柳
6419.40 〃 〃 八鹿
6419.70 養父郡養父町
6419.92 朝来郡和田山町和田山
6429.15 〃 山東町梁瀬
6429.61 〃 朝来町
6439.01 〃 生野町
6520.60 氷上郡氷上町御油
6530.81 〃 〃 天岡
6530.12 〃 〃 石生
6530.51 〃 山南町岡本
6429.59 〃 青垣町遠坂佐治
6520.75 〃 市島町梶原南
6530.04 〃 春日町稲塚
6530.07 〃 〃 下三井庄
6530.09 〃 多紀郡西紀町本郷
6530.37 〃 〃 〃 小坂
6530.48 〃 篠山町西浜谷
6531.42 〃 篠山町東本庄
6530.95 〃 今田町釜屋
6439.06 多可郡加美町鳥羽市原
6439.26 〃 〃 観音寺
6439.67 〃 中町安楽田
6439.69 〃 黒田庄町喜多

6439.97 多可郡八千代町下三原
6449.28 加東郡滝野町河高
6449.48 〃 社町家原
6540.52 〃 東条町吉井
6449.32 加西市上道山町
6439.99 西脇市堀田町
6438.59 神崎郡大河内町寺前
6439.41 〃 神崎町加納
6438.89 〃 市川町鶴居
6448.29 〃 福崎町
6438.13 宍粟郡波賀町谷
6438.33 〃 一宮町横山
6438.80 〃 山崎町高下
6438.82 〃 〃 三谷
6437.07 〃 千種町岩野辺
6428.22 〃 波賀町道谷
6437.34 佐用郡佐用町上石井
6447.84 〃 〃 佐用
6447.27 〃 三日月町三日月
6447.06 〃 南光町米田
6447.03 〃 上月町櫛田
6447.12 〃 〃 久崎
6448.60 竜野市竜野町門外
6449.96 小野市久保木町
6550.11 三木市細川町桃津
6552.36 伊丹市南野字辻
6552.67 尼崎市西本町
6552.63 西宮市社家町
6552.52 芦屋市浜町
6552.60 神戸市灘区畑原通
6550.79 〃 生田区北長狭通
6530.89 三田市母子
6540.69 〃 加母
6552.13 〃 小野
6552.13 宝塚市口谷
6552.15 伊丹市北伊丹
6469.09 明石市大久保町
6458.07 姫路市中二階町
6459.41 高砂市曽根町
6457.29 相生市相生
6447.64 赤穂郡上郡町本町
6457.36 赤穂市加里屋砂子
6457.44 〃 堀谷西

鳥取県

6407.93 岩美郡岩美町岩井
6417.50 八頭郡郡家町奥谷
6416.98 〃 用瀬町用瀬
6417.80 〃 船岡町郡家
6417.61 〃 八東町大字安井宿
6417.72 〃 〃 北山
6417.85 〃 若桜町中原
6427.18 〃 〃 小船

岡山県

6437.23 英田郡大原町下町
6446.99 〃 作東町川北
6446.35 〃 英田町上山
6436.57 勝田郡勝田町真加部
6457.10 備前市三石
6456.16 和気郡吉永町吉永中
6456.15 〃 和気町和気
6436.60 津山市堀坂

「かたぐるま(肩車)」

「肩車」に関する方言形は多く『日本言語地図』には二枚の図にわたって百八十語形ほどが記されている。それによると、県南部の播磨を中心とする地域はカタクマで隣の岡山県の大部分も同じカタクマ地域である。県北部の但馬はテングルマであり、これは鳥取・島根へと続き、その南の広島もテングルマである。このテングルマは三重県南部・和歌山県南部から、愛知もそうであり、さらに関東から福島県までの地域をもっている。

県内にはカタクマ地域の播但国境付辺にカタキウマがあり、但馬中央部にクビタマが数カ所あることになっている。

今回の調査では、標準語形とみられるカタグルマが十九地点ある。そして、これは但馬も播磨も県全体にあちこちと点在している。標準語形は教科書語形、新聞語形、テレビ語形であるから理解語形として全国どこにもある形ということになる。

ただこれが、あるまとまり分布をしているならばその地における使用語形になっているものとみることができよう。今回のように点在する場合は、はたして使用語形かどうか疑わしいということも考えられる。まして、その他の語形と並用という場合は理解語形に近いと考えてよいのではないだろうか。

県の大部分を占めるものはカタ系のカタグルマ・カタグマ・カタグ・カタクマである。

カタクマは五十九地点あり、これは播磨を中心として但馬からこれに隣接する京都府におよぶ。

これに対して、テングルマ・テングルサンは鳥取、岡山両県境全域に勢力をもつ。

テングルサンは言うまでもなくテングルマからきたものである。このテングルマ系は全国に広がる形であり近畿周辺にあるものであるので分布からみてカグルマの一時代前のものかと思われる。カタグルマに接する地域にあるＡＢＡ型分布をなすものである。

カタグルマは標準語形で「肩車」という意味であるが、このカタグルマのルの脱落かと思われるカタグマがある。そうするとカタグはどうであろうか。さらにそのマの脱落とみるのもおかしいが、「かつぐ」ことをこの辺りではカタグと言うからか。しかし終止形を名詞に用いるというのもおかしいと思う。

カタクマは何であろうか。これについては『日本言語地図』の「解説」に次のように記してある。

柳田国男「肩車考」や前田勇『上方語源辞典』では、カタクマはカタコマ（肩駒）から転じたものとの考え方を示しているが、分布からみて、カタコマがカタクマより、より古いとはかならずしもいえない。

とあり、さらにカタ類の分布と歴史について続けて次のようにある。

カタクマはカタ類の中で最も勢力が大きく近畿を中心に中国東部・四国北部へ拡がり、静岡と福岡とにもそれぞれまとまった分布がみられる。

この分布からみて、カタクマは、中央に発生し各地へ伝播したとみられる語形の中で最も新しい勢力であると考えられる。静岡、福岡のカタクマは、ある時期に直接中央からもたらされて拡がったものであろうか。なお、カタクマは『日葡

辞書』にCatacumaとしてみえており、室町末期にはすでに中央で用いられていたようである。

カタグルマは東京、埼玉に集中的にみられるほか、北海道内陸部、関東北部から東北にかけて、長野・静岡・愛知北部から岐阜南部にかけて、三重西部から奈良東部にかけて、和歌山南部・岡山北部・愛媛西部などにややまとまった分布を示している。関東のカタグルマは中央に集中しており、東日本では最も新しい勢力とみられる。これらはカタウマとテングルマとの混交の結果生まれたとも考えられるが、あるいは西日本のカタグルマがある時期に関東に移入され拡がったのかも知れない。

近畿のカタグルマはカタクマをとりまく形で分布しておりカタクマより古いものであると考えられる。中央にカタクマが用いられた時期にテングルマが発生し、両者の混交によりカタグルマが生まれたのであろうか。

右の「解説」によると、先に記したテングルマのABA型分布の新古は少し訂正を加えなければならないことになる。地図の上で近畿周辺のABA型であっても、このテングルマは古い時代にも中央にはなく別に発生したことになる。しかし、テングルマは中部、関東と中国地方にあるということからどうしても完全にABA型であるし、近畿の東と西とでこんなに大きな勢力をもつものが別々に発生するというのはどうかと思う。

カタクマが「肩駒」ならカタウマ、カクンマは「肩馬」に間違いない。

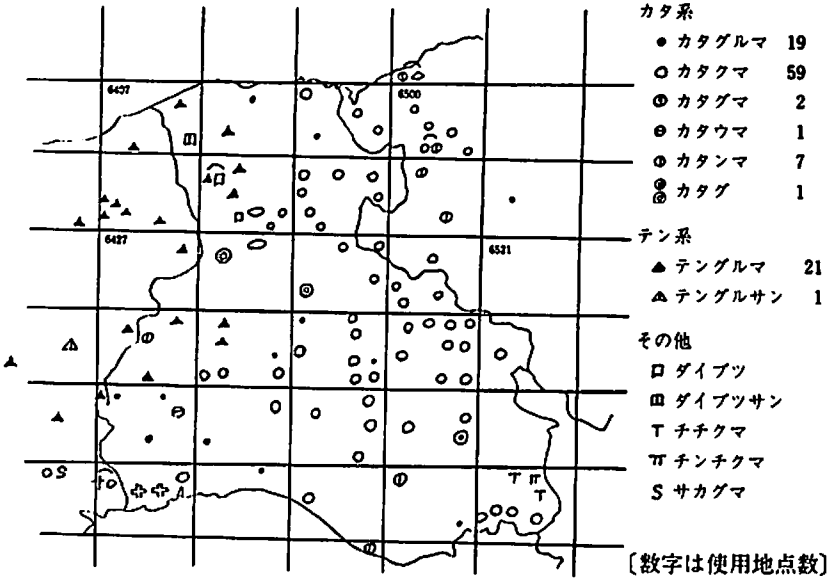
但馬に三か所見られるダイブツ、ダイブツサンは「大仏」で肩車されて坐っている形、自分の足を使わず高い所に坐っているということから来たものであろうか。これは県下にわずか三地点みられるだけである。

チチクマ、チンチクマが宝塚市あたりにある。このクマはカタクマのクマと同じものだと思うが、チチ、チンチとは何であろうか。チチという音からすぐ考えつくのは、「父」「乳」ぐらいであるが、「乳」はおそらく関係ないだろうが、この語から何か幼児とか、幼いとかの意をもたせるのであろうか。「父」とすれば、肩車をされるのは幼児で、するのは父親が多いから、何らかの関係があるかもしれない。しかし、幼児語としての「父」はいささかそぐわないようにも思う。

クビタマは肩車された子が肩車した人の首をもつというところからの名称であろう。

タカタカは「高々」で「高いところ」「高く高く」「高い高い」の意と考える。

(図一)「かたぐるま」



クルクマは何かの混交形と思うが、クマはカタクマ、チチクマのクマであるが、クルはカタグルマのグルマ（車）と関係があるのだろうか。

サカグマも肩車された子の状態と何か関係があるのだろうか。「逆」ということも考えてみるがどうだろうか。

トーニンはわからない。

分布は播磨を中心とする県の大部分がカタクマ系である。それに中国地方よりにテングルマ系があることから、先のＡＢＡ型分布と一応考えてみた。

但馬南部の朝来郡、同じく養父郡南西部にカタグマがある。これはカタクマとテングルマとの間にあることから、クマとグルマとの混交によるものかと見られる。あるいは、クマの語源がわからないことから民衆語源意識から「車」の意によったものかもしれない。

県南部の赤穂市にトーニンがあるのはわからないが、この地の民俗などと関係があるのだろうか。

「おにごっこ(鬼ごっこ)」

「ひとりのこどもがオニになってほかのこどもを追いかける。鬼につかまったこどもが代って鬼になる。そんな遊びを何と言

いますか」

『日本言語地図』では約二百五十の語形がでている。「解説」に次のように記してある。

「おにごっこ」という遊びは、全国各地の状況を比較すれば、おそらくルールが多様で、ある特定の地点においてさえ何種類かの遊びが平行的に行なわれている可能性がある。したがって、一地点に、その呼び名が何種類か併用されている可能性がある。しかし、この質問では、細かにルールの違いによる差異は捨象して、地図の右下に示した質問文の範囲内で、いわば総称といったものを求めた。

『日本言語地図』では播磨はオニゴトで、但馬はボイヤイコである。但馬に接する京都府でボイカケヤイがある。ボイ系はほかに秋田県のボイコ、富山、愛知のボイヤイなどがある。

今回の調査では、標準語形のオニゴッコが五十九地点ある。また、オニ系に、オニゴト、オニゴク、オニサンゴッコ、オニアイがありこれが二十九地点になるので、オニ系は八十八地点となる。百十三地点の中の殆どがオニ系ということになる。

オニゴッコの次に多いのがオニゴトである。女の子のママゴトなどのように「ーゴト」によるものである。

オニアイは、オニ系にある。このアイがヤイとなるものがあるが「ヤイ」は「試合」などにある「ーし合う」の意の「アイ」連母音の間に半母音が入ったものと思われる。

関西では「追う」ことをオアエルということからオアエル系のオアエゴッコ、オアエゴト、オアエヤイがある。

これらについて「解説」で次のように記してある。

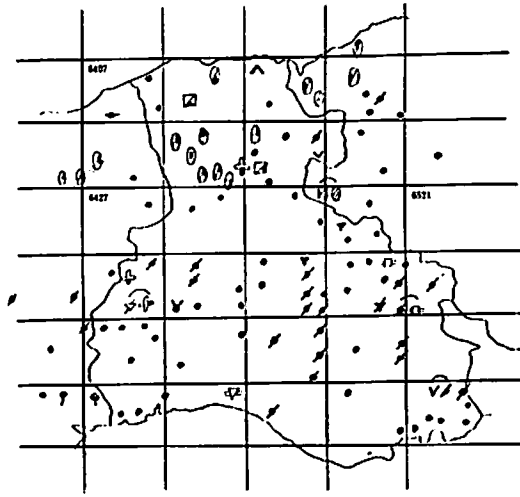
オニゴクは岡山をはじめ兵庫、奈良に見られる。このゴクは他の要素とも結合して、近畿周辺に分布する形態素で、「かくれんぼ」にも現われ……

オニゴトは福島、新潟を中心とする一地域、近畿一帯、中国、四国、九州北部にそれぞれ分布地域を持つ。

オワエの類には多少まとまった分布領域が認められる。オワエゴクは佐渡、兵庫、香川に見られこれもゴクの領域を形成する。オワエゴトは、近畿に七地点、北海道、佐渡に各一地点ずつ見られる。近畿のものはオニゴトの領域内にあり後部分ゴトを共有する。

（図二）に見るように今回の調査の県北部にはボウ系が多いが、但馬あたりでは「追う」ことをボウということからボイヤコなどの形が出たと見られる。「解説」にも次のように記してある。

『全国方言辞典』によれば、「追う」を「ぼう」と言うとこ



(図二)「おにごっこ」

ボウ系
- ボイヤコ 6
- ボイヤイコ 2
- ボイヤッコ 1
- ボイヤ 2
- ボイヤー 1
- ボンヤコ 1
- ホンヤコ 1
- ボニヤ 1
- オニボニヤ 1

ニゲル系
- ニゲコ 1
- ニゲッコ 2

その他
- ジュンサゴッコ 1
- 1
- カクレンボ 2

〔数字は使用地点数〕

オニ系
- オニゴッコ 59
- オニゴト 25
- オニゴク 2
- オニアイ 1
- オニサンゴッコ 1

オアエル系
- オアエゴッコ 2
- オアエゴト 1
- オワイゴト 1
- オアエヤイ 1

オウ系
- オイカケヤイ 2
- オイヤコ 1
- オイヤッコ 1
- オッカケッコ 1

ろは、東北各地、新潟、北陸、長野、岐阜、愛知、京都、兵庫、山陰、広島となっている。……全体としては北海道、東日本海岸側、北陸、東海、山陰とかなりまとまった分布が見られ「ぼう」の分布とほぼ重なると言えよう。

と、ボウ地域はかなり広いものである。

「追う」に対して「逃げる」のニゲコ、ニゲッコがあるがこれは地点どうしの関係よりも自然発生的にできたもので分布地点からこれを見るものではないと思う。

ジュンサゴッコも「巡査」であって、これも自然発生的なものと見る。

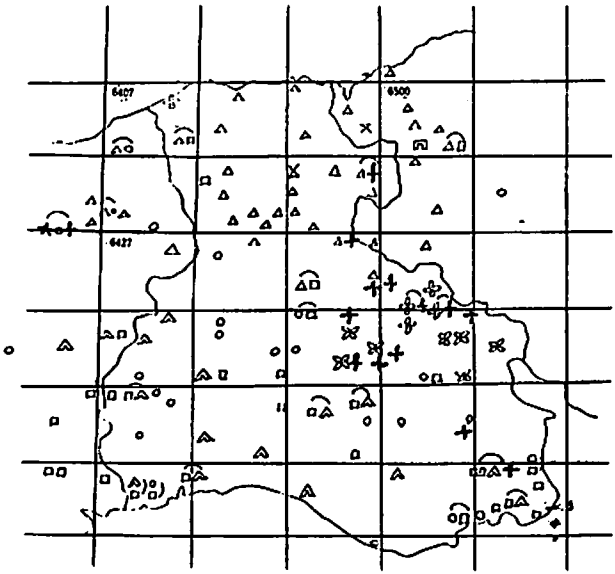
カクレンボは、その遊びが似ていることから、被調査者が間違えたか、それとも、この二つの遊びをいっしょにして言うようになったものか。

「むしる」

「果実などを枝から手でとることを何と言いますか」

これは、広戸惇著『中国五県言語地図』(風間書房)にあるものである。

今回の調査では全体的に『日本言語地図』によるものが多い。それは、地方における状況をこまかく見るとき、その地方だけ



(図三)「むしろ」

△ ボル	37
ボギル	1
ボジル	1
モグ	14
ボグ	5
ムグ	7
□ チギル	28
モギル	1
ムシル	16
ミシル	1
ムクル	1
○ トル	24
● ムシリトル	1
バレル	1

〔数字は使用地点数〕

を見て新古を考えても全国的に見ると、そこにいくらかのずれがあるときがある。

このような観点から全国的比較と県における地形その他の条件をこまかく見た上での場合との比較を試みようとするものである。

『日本言語地図』にはなく、『中国五県言語地図』にあるものをみようとするのは、この書にはやはり西日本的特徴のある語も多いのでそのような観点からということと、鳥取、岡山に続く兵庫の状況を見たいということを考えたからである。

今回の調査では、ムシルは県南部の比較的交通の便利な地点に多い。ムシルは十六地点である。ムシルと同系と思われるミシル、ムクルが各一地点ある。ただ、ムクルはムシル地域からかけ離れた京都府のボル地域の中にあるのでムシルと同系かどうかは疑わしい。

県北部の但馬は完全にボル系であり、ボルのほかにボギル、ボジルが各一地点ある。この地域は、先の「おにごっこ」の場合も、「追う」ことを「ボウ」という地域である。

このボルは西の鳥取県、東の京都府にもつながるものである。丹波地域では、モグ、ボグ、ムグの地域であり、これは東播といわれる播磨の東北部にまでおよんでいる。

もし、北の但馬から丹波、東播の順で、ボルーボグーモグームグという順にならんでいれば興味があるが、この図で見る限り、はっきりとそのような形にはなっていない。しかし、ボルとモグと、また、ボグとモグとの併用地域などが多く、そして但馬南東部、丹波、東播の距離はごく近いところから、これらは互いに関連し合っていることは確かである。

トルはごく一般的語形であるから各地に点在するのは当然である。

ムシリトルはムシルの中に入れてよいが、これは一地点である。

バレルは鳥取県であり、自然にそうなるという自動詞と見られるがこれは一地点である。

この図におけるボルと、先の「おにごっこ」の図のボウとは地域が一致しているところに興味がある。

「めんこ(面子)」

「子どもの玩具。ボール紙で作った円形または四角形の玩具。表面にいろいろな絵が書いてあり、鉛製のものもある。また、それを使ってする遊び。交互に相手の地上に置いたものを打ち当てて、裏返らせたり、その下に自分のを入れたりするのを勝ちとする。そのものを何といいますか」

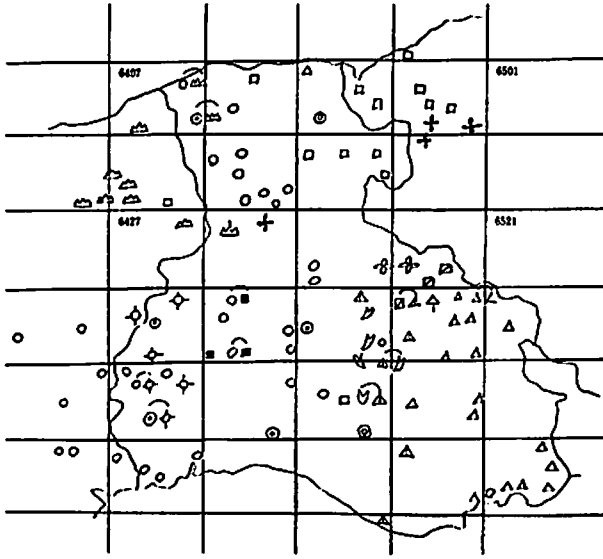
これは『日本言語地図』にも『中国五県言語地図』にも出ていないものであるが、一般に子どもの遊び方、遊び道具などには方言語形が多く、しかも、その語形の変遷もはげしいことが多いのでこれをとりあげてみた。

この図を大きく分けて県東部と西部、その東部を北と南とすると、まず、但馬西部、播磨西部をあわせた西部地域はパッチンなどである。但馬東部はメンコ系、播磨東部とこれに丹波、摂津を入れた地域がベッタン系となる。鳥取はゲンジ系である。

これも単純に周辺分布の原則ということから言えば、ゲンジがもっとも古く、ついでパッチンであり、もっとも新しいものがベッタンということになりそうである。その次に新しいのはメンコだろうか。ベッタンとパッチンとの中間地域にカエシ系がある。

カエシはカードをひっくり返すからのことであろうが、語が変化するとき、そのどちらでもない中間語形が一時的に存在するものとすれば、カエシはもっとも意味のわかりやすい語形である。

(図四)「めんこ」



〔数字は使用地点数〕

チン系	
○ パッチン	33
パチンコ	5
ペッチン	6
コッチン	2
ベッタ系	
△ ベッタン	16
ベッタ	1
ベッター	1
ベッタン	7
ゲンジ系	
ゲンジ	9
ゲンジガエシ	1
メン系	
□ メンコ	18
メンカケ	3
カンメン	3
パン系	
パン	4
パンムキ	2
カエシ系	
カエシ	3
カヤシ	1
カヤシン	1
その他	
L マルエ	1